



喜多塔

与謝蕪村 生誕三百年

茶屋町ゆかりの「菜の花や月は東に日は西に」の句で有名な江戸時代の俳人、与謝蕪村が生まれて、今年で三百年となります。

与謝蕪村は摂津国東成郡毛馬村の出身で、現在の大阪市北区、都島区の北部あたりで享保元年（一七一六）に生まれました。

この生誕地とされた根拠には、与謝蕪村が安永六年（一七七七）に発行した『夜半楽』という冊子に、「春風馬堤曲」という詩を載せており、この詩について、弟子の賀瑞に宛てた添え書きが昭和初期に見つかり、その中で、「馬堤は毛馬堤也。即、余が故園也」と書かれており、この事から与謝蕪村は大阪の人であるという事が分かりました。

この「春風馬堤曲」を発表する三年前の安永三年三月二十三日に、蕪村は京都東山での連句の会で「菜の花や月は東に日は西に」の句を詠んでいます。この時点ではこの菜の花がどの菜の花を指したのか蕪村自身も語っていませんが、「春風馬堤曲」にみられる強烈な郷愁の念と、また当時、毛馬村から茶屋町あたりには菜の花畑が広がっていた事を鑑み、幼き頃に見た、茶屋町あたりの菜の花畑を思っ詠んだものであろうと考えられています。

幼き蕪村が毛馬堤からみた風景は、三百年を経てすっかり様変わりしましたが、菜の花の優しき風情は、三百年前も今も変わらず、梅田キタに春を告げています。

茶屋町・鶴野町の菜の花

右記の与謝蕪村ゆかりの菜の花が、今年も三月下旬から四月上旬にかけて茶屋町・鶴野町に飾られます。これは北梅田地区まちづくり協議会の下部団体である鶴乃茶屋倶楽部のまちづくりの取り組みの一環で行われているもので、蕪村の時代に咲き誇った菜の花の風情を今に伝える、歴史的にも意義ある取り組みです。ぜひ茶屋町鶴野町にお越しください。

神社豆知識「灯笼」

灯笼は社寺の境内や建物を明るく照らす為に用いられる照明具で、読んで字の如く「灯明を入れる為の籠」です。飛鳥時代に仏教伝来と共に日本に伝わりました。

当時は「貧者の一灯」の話にあるように、灯明には仏教への信仰心を表す意味もあり、その灯明を保護する灯笼は大切なものとして、仏堂の前などに一基だけ置かれる形式が多かったようです。

奈良時代以降、神仏習合の影響もあり、神社にも石灯笼が奉納されるようになり、神社の場合は、信仰の意味合いもあります。が、寺院に比べて鎮守の杜など、樹木が多い事から、安全の為の照明としての役割が大きく、奈良の春日大社や、京都の石清水八幡宮などは、参道にずらりと石灯笼が並んでおり、参拝者の助けとして、また奉納者の心意気の現れとして、数多く奉納されました。

平安時代中期頃から、金属製で殿内に吊り下げられる釣り灯笼が用いられるようになった事から、釣り灯笼も神社に多く奉納されるようになります。京都の北野天満宮には多くの金銅製釣灯笼がこれまで奉納されており、二十五年に一度の萬燈祭では平安を願ってまさに万の数の灯明が捧げられます。

当宮にも戦前からの石灯笼が御本社、御旅社併せて四基伝わっており、うち御本社にはかつて茶屋町で灯された菜種灯笼と呼ばれる大きなものも現存しています。

灯笼は近代以降、灯火が油からガス、灯油、電球、LEDと目まぐるしく移り、この百年で照明具としての役割は減りましたが、先人たちが灯明に託して、世の中が明るくありますようにと御神前に捧げた祈りの思いをいま私たちに伝え、一燈照隅 萬燈照国の心を表してくれる、そうした心の明かりとして私たちの行く道を照らしてくれています。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編者 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀 知

